

おはなし散歩道

キャベツ畑の夜

町田市 大澤桃代

野ねずみが一匹、キャベツ畑に住んでいました。野ねずみはひとりぼっちでした。

ある晩、ガサツ、ガサツ、というかすかな物音で、目が覚めました。何だろう？

野ねずみは穴から抜け出し、地面に顔を出しました。

畑はしんと静かでした。月がキャベツ畑を照らし、風が川岸の桜を揺らしているだけです。風の音かな？と、ねぐらに戻ろうとしたその時です。背中の方から声がありました。

「あの、こちらは野ねずみさんの家ですか？」

振り返ると、白ねずみがいました。見たことのないねずみです。「驚かせて、すみません。行くところがないのです」

白ねずみは、人間に飼われていましたが捨てられたと言います。あちこちをさまよい歩き、この畑に着いたのです。

「昼間は、キャベツに隠れてじっとしていました。白ねずみがブルツと震えます。蛇か蛙に出会ったのでしょうか。」

「今夜は、ここにいてもいいですか？あたりの様子がわからないのです」

「もちろん！」

野ねずみは、白ねずみに笑いかけました。それから、畑を案内することにしました。

「この葉が柔らかいよ」野ねずみはキャベツの上に飛び乗りました。白ねずみも上りました。「キャベツってこんな所で、できるのね」

二匹はキャベツに顔を突っこんで、葉っぱをお

腹いっぱい食べました。白ねずみが空を見上げて、言いました。

「ねえ、あれは何？」

「あれは月だよ」野ねずみが答えます。白ねずみは、月を見たことがなかったのです。そうして、キャベツのつべんに立ち上がって



手を伸ばします。「届かない、どうして？」

白ねずみは首をかしげます。その姿が可愛くて野ねずみの胸が、きゅん」と鳴りました。「月はずっとずっと高い所にあつて、取れないんだよ」

野ねずみが言う、白ねずみは恥ずかしそうです。

白ねずみはゲージで飼われていて、部屋を出た事がありませんでした。「わたし、何も知らないのね。じゃあ、あれは何？」

白ねずみが川辺を指します。桜の花が咲いています。

「あれは、桜だよ」「じゃあ、あれは？」

白ねずみが桜の木の根元を指します。黄色い花がたくさん咲いています。「菜の花だ。行ってみよう」

野ねずみは、キャベツから飛び下ります。白ねずみも恐る恐る下りました。二匹は川へと駆けて行きました。

白ねずみは桜と菜の花に見とれています。「きれいねえ、外ってこんなにきれいだったのね」

白ねずみは言いました。「あつ、あそこにも菜の花が咲いている！」

としました。川の真ん中にも黄色の影があつたのです。

「危ない！」野ねずみは、思わず白ねずみを抱えました。二匹の目の前を、うねるように水が流れてゆきました。

「あれは、花じゃない！月が水に映っているんだ」

野ねずみは叫びました。それから、ようやくほっとしました。

「ごめんさい、でも：」

白ねずみはうつむきます。「でも？」

「あのきれいな花をあなたにあげたかったの：：：色んな事を教えてもらったから」

そうだったんだ、野ねずみの心が温かくなりました。「僕の家に来ない？僕もひとりぼっちだったんだ」

こくん、と白ねずみがうなずきます。月が二匹を、優しくしてあげました。(完)

(さし絵・小出 茂)

母が残してくれたもの

シンシユコ

友納あけみ

立春も過ぎ、暦の上では春となりました。寒い日々も、もう少しです。

私は一月の末に生まれました。一番寒い頃に生まれました。

「誕生日は生んでくれた母に感謝をする日だ！」と教えて頂いたことがあります。

母が亡くなったから十年目になりました。十年ひと昔と言いますが、長い間、母と住んでいたこの家には思い出がたくさんあり、未だに朝起きると母が起きて来そうな気がします。

母は父親の仕事の都合で満州に生まれ、女学校へ行くまで大陸育ち、人目や細かいことは気にしないで、物には執着せず、旅や食事、観劇、音楽会、雰囲気や、時間等の消えてしまう瞬間、瞬間を思いきり楽しむことが大好

きな人でした。遺産と言える形ある物は何も残してくれませんでした。幸せに時を過ごすたくさんの術と、温かな人間関係を残してくれました。最高の遺産だと、とても感謝しています。

父と母はすごく仲の良い夫婦でしたが、母が四十歳を迎える前に父は亡くなってしまうました。それから八十四歳でなくなるまで、母は父を愛し続けて、がんの告知をされた時には、これで父の元へ行ける：「こんなお婆さんになつてしまつて、パパに会つた時、いやだわ！」と微笑み

母との別れ際、最後のお化粧をしてあげると、棺の中の母は少女のように美しく、みんな驚くほどでした。きつと父が迎えに来たのだと私は思いました。人生が一つの塗り絵だとすると、母は全面を綺麗に塗り終えて命を終えた気がします。わが母ながら見事な人生だと思えます。私も、そんな母に負けないよう、自分の命を自分なりに見事に生きたいものだと、願っております。母は私が歌を歌って生きていくことを一番応援していてくれました。「頑張つて！」という声が聞こえる気がしています。今でも私を見守ってくれていると信じて：



参拝のうちに歌を披露する友納さん

高尾山

四季の草花

96

サンシユコ 山菜萐

ミズキ科・ミズキ属



江戸時代に生薬の「山菜萐」を作る木として中国から渡来し、そのまま音読みして「サンシユコ」の名前になったと記録されています。

早春、葉が芽吹く前の二月から三月に黄色い花を咲かせる事から、「春黄金花」(牧野富太郎博士の命名)や、秋にはグミのような赤い実を付け、その様子を「サンゴ」に喩えて、「秋珊瑚」の別名があります。「菜萐」はグミのことです。

葉は互生し、長さ四〜十センチほどの楕円形で、表裏に毛が付いています。高さ五〜十五メートルになる落葉低木です。

現在でも、「サンシユコ」の粉末や「サンシユコ」のエキスが作られています。

(撮影・文 中村 毅人)